
純粹バニーガール

高宮 かしお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純粹バニーガール

【Nコード】

N0700V

【作者名】

高宮 かしお

【あらすじ】

私はノエミ。昼はOL、夜は銀座のバニーガール。自分とお金が好き。余計な時間を取られる彼氏をご遠慮いただきたい。そんな私
が、これは、たぶん、恋をした。でも、どうやってアプローチすればいいんでしょう。客の席では饒舌、プライベートでは意外と奥手な青いウサギの片思い。ありきたりな恋愛小説です。*注：微々たるものですが、震災について記されている箇所があります。苦手な方はご遠慮ください。自己サイト「かしお乃」でも掲載しています。

第一話 ネオン

私は銀座のバニーガール。

源氏名はノエミ。

カシャン 終業のタイムカードを押す。 17時50分

カシャン 入店のタイムカードを押す。 19時00分

会社では”新入社員”の肩書きもとれた。

お店では二年も勤めるとお客様からはあまり珍しがられない。お客様は新人がお好き。

それでも私はなかなか可愛がられている方だと思う。

OLと兼業だから。

お店に入るとキッチン脇の狭いロッカールームに直行。女の子たちのそれぞれの香水が体温でむっと立ち上るそこで、わあわあとバニーコートに着替え、耳のついた力チューシャをピンで固定し、メイクを直す。最後に壁に張り付いている大きな姿見の前で体を捻って、網タイツのバックラインが曲がっていないか確認をする。ふっくらと丸いお尻を包むシームレスのストッキングの上をラインが足首を通ってヒールの踵までまっすぐに通っているか。

バニーコートが好き。私のコートはコバルトブルーのサテン地。青は肌を白く引き立てる。

私の仕事は席に着いてお酒を作つてにこにこ笑つこと。下品にならないように。

男の人たちが私の冗談に笑い、私の作る適当な水割りのグラスを傾けるのも、胸の脇にさしたライターをさっと取り出して、差し出

す火で彼らがタバコを吸うのを見るのが好き。
それでも最近は禁煙の傾向が顕著だけれども。

銀座の客ってなんか、あか抜けない。ってキョーコは言うけれど、私は別にそんなことにこだわらない。

「今日もヒマヒマだね。ま、平日ならこんなもんか」
隣に座っている同期のキョーコが、まつげにビューラーを当てながら私に言った。彼女は閉店後も別のお店でホステスをする本格派だ。

照明をやや暗く落とした広いラウンジ内には20時すぎてもお客様は4組だけ。それも2組はお目当ての子指名だから、残りのバニーズはざらりと並んで隅の空席でひそひそおしゃべりをしたり、せつせとDMを書いている。

「まあ、未だに”自粛気味”でますます不景気だからね。不思議でもないけど。あーあ、今日は早あがりかなあ。お給料減っちゃうつらいー。もう冬物が出ているというのに。新しいコート欲しい」
「しょうがないわよ。ノエミはいいわよ、昼が本業で。こっちは最近かなりキツいんだからね。それよりさ、知ってる？ ゆりえが経理に告つたらしいとか」

彼女はマスカラでまつげを下から撫で上げ、正面を向いたまま私の方に体を傾けて囁いた。

”経理”って言うのはお店のバーテン、小松のこと。

半年くらい前に人が足りなくて、ボーイの石崎が小松を連れて来た。なんでも石崎と同じ大学院生だつて、女の子たちが噂してた。そう、噂になるくらい小松は女の子たちの目を魅いた。まず長身。細面の涼しげな顔にフレームレスのメガネが一層、切れ長の目の温度を下げている。今時めずらしい黒髪はきつちり後ろに撫で付けら

れ、賢そうな額がスツキリと顔の全体の輪郭を際立たせていた。

黒いベストと蝶タイに負けてなくて。

そんな彼を、キョーコは綺麗な歯並びを見せて笑いながら”あれで腕サツクしたら経理課だわね”と言い切った。それから彼は経理、と私とキョーコの間で呼ばれている。

彼は本当にそのニツクネームの通り”堅い”タイプの男だった。女の子たちがいくら絡んでも、社交辞令の一つもなければ業務連絡を口にする以外、ずっとカウンターの裏で自分の仕事に没している。石崎や他のボーイとはなんだか楽しくやっているみたいだけ。

「！ ええっ」

「バカっ！ 声大きい！」

はっとして見渡すと、何人かの女の子たちが私たちの方を見ていたが、また何事もなかったように自分たちの会話に流れていた。

「だ、だって、店内の交際って禁止じゃない」

私は声を落とした。

「交際って……」

くすつとキョーコはマスカラを伸ばしている睫の下で目だけを私に向け、笑った。

「ゆりえ、けっこうしたたかだからね。だから彼女にはそんな”タブー”も関係ないのよ」

「……で……どうなったの？ 二人は」

「しーらない。だって、私、ゆりえが誰と付き合おうと興味ないもん。それこそ付き合っただけにバレて辞めさせられたら、私がトップになるだけの話」

キョーコはコンパクトを睨みながら鼻の頭をパフで押さえていた。「バカね、辞めさせられるなら経理のほうに決まってるじゃない。

ゆりえは稼ぎ頭なんだから」

ゆりえがね……そんな素振り、全然見せなかった。さすがにトツ

ブは違うわ。

キョーコの言葉に妙に感心しながらも私は少し目眩を感じて瞼を閉じた。

ちかちかと、銀座のネオンが瞼の裏に瞬いた。

銀座のネオンが一番好き。すぐく高級で、そのネオンひとつひとつが宝石の一粒にも思える。その中を歩く私は、そんな宝石の一粒になる。

肌を磨き、ロングヘアのトリートメントも怠らない。リンパドレナージュのサロンにも、ジムにも通う。アイラインを丹念に引き、ネイルを塗って、グロスを嫌みの無い程度に乗せれば、大抵男たちは数秒の間、遠慮がちな視線を私の上に数秒ほど留める。カフェでもブックストアでも地下鉄のホームでも。彼らの瞼の裏で、私は輝くネオンの一つになる。

それでも最近はずっと、ネオンの輝きも減った。

アルタの照明だってまだ落とされたまま。

街が、暗い。

それでもその暗さにほっとしている自分もいた。今まで周りが眩し過ぎて何かを見落としている気がしていた。眩しさに目がくらんで、大切なものが見えなくなっている気が。それでも自分もその光りの中にいたいと、その輝きを手に入れようと必死になる。手に入れば私も輝ける。そう思っただけで輝きを求めて次から次へときらびやかなもの、美しいものに手を伸ばし、手に入れなきゃ、と思う。

このままどんどん暗くなれば。真っ暗になって。そしたら闇の中に何が見えるだろう。闇の中なかの一点の光こそ、私が一番欲しいものかもしれない。でも、それが何か、分からない。

いつの間にか瞼の裏のネオンの煌めきは一つ一つ消え、闇が広がっていた。

「……さん、ノエミさん」

自分の名前を呼ばれていることにやっと気がつき、はっと顔を上げ、小松と目が合う。” 経理” はテーブルを挟んでちょっと困ったような表情で私を見下ろしていた。待機中の女の子全ての視線がやわらかく、それでもしつかりと私の上に漂っているのは気のせいじゃない。

「ノエミさん、お客様からお電話です。キョーコさんは三浦さんいらしています。指名です」

「はい」

キョーコが間延びした声で返事をしながら、小物をポーチに仕舞う。

彼のことを話題にした矢先、本人の登場にやや動揺しながら私は立ち上がる。ヒールで立つ私よりもまだ彼の目線は高い。私だってそんなに背の低い方じゃない。彼は私が通りやすいように少し身を引いた。

「あ……」

彼は短く呼び止めた。びくつと体が跳ねた。心の乱れを抑えながらゆっくり振り向く。

「なにか、付いてますよ」

彼はそつと手を伸ばして私の毛先に触れた。その微かな感触が髪から伝わると、なんだか全身を撫でられた気がした。

「なんだ、糸くずでした」

彼がそれを取るのにふんわりカールされた一束の髪にそって指を流した時、むき出しの肩に指先が軽く、触れた。瞬間、そこだけが火傷したように熱くなる。

「あ、ありがとう」

私は慌てて電話のあるクロークへ向かった。

その後やつと着いた席は、馴染みの高田さん、”たかやん”の席だった。

”たかやん”は私よりも勤続年数が長い常連さんだ。たかやん、橋さん、市井さんのおじ様三人一組。いつもお土産を手に来店するから、女の子たちには人気がある。

「あつ、たかやんだー。チーフ、逆指名！ たかやんのところに行きたーい」

一人がそう言うと、他のバニーズも口々に私も、私もと愛想を振りまきだした。

チーフは鬱陶しそうにひらひらと手を上下させる。

「うるさいよ、お前たち。えーと、倫子さんとノエミさん、優花さんお願いします」

「はい」

私はコンパクトで形だけ、メイクを確認して席に向かう。

「おー、古株が来たな」

「いらつしゃいませー。つて、ヒドいたかやん。私まだ二年目だもん」

「十分古いよ」

倫子が手早く三つのグラスにからからと氷を入れる。優花は女の子用のグラスに水を入れている。ウチの店は無理に飲まなくてもオツケーなのだ。

「古いつて言うけど、たかやんには負けますから。開店オープン当時から来てるんでしょ？ 奥様にもバニーの格好させてるつて噂ですよ」

「ノエミちゃんには適わないな、こんな生意気なのに人気があるから不思議だよ」

「えー、そんなことはありませんよお、あ、じゃあカンパイ」

全員にグラスが回ったところでそれを打ち合わせた。それからお土産のまだあたたかい明石焼をみんなでつまんだ。

いつものようになかなか盛り上がったが、私は半分上の空だった。

” ゆりえの告白 ” が最後から二番目の積み木で、 ” 糸くず ” が、最後の積み木。

それは頂上に置いたとたん、がらがらと崩れた。

” 落ちた ”

多分私は、小松がバーの後ろに立った時からその存在を気にしていた。気にはしていたけれど、挨拶以外、お世辞も言わなければ偶然視線が合つても顔の筋肉一つ動かさない彼に私は ” 喰えない男 ” の札を張っていた。

自分に色目を使わない男は ” お呼び ” じゃなかった。もともと私の生活に 『 彼氏 』 という存在が入り込む隙間は無い。仕事と、バイト。私はお金を稼ぎたいの。

第一、最低週1回とかデートの約束しなきゃいけない、それと毎日ケータイでのメールのやり取り、すぐに返信出来なかったら機嫌が悪くなったりする…… and and and……つまりそういう彼氏の存在とかつて、正直ウザイ。

そんなふうにな小松のことも自分のテリトリーから追い出そうとしていた。

でも。

ゆりえのことを聞いたときに、なんだか妙に焦りの気持ちが沸き上がり、彼の指が肩に触れたときに、再び血が巡り、勢いよく循環して体中に熱を運び始めたのを感じた。

それだけだった。

でも、それで十分だった。

自分の気持ちに気がつく材料としては。

「……で、いいよねえ？ ノエミちゃん」

ハツと私は我に返り、話しかけてきたたかやんに微笑む。ヤバいやバい。仕事中だ。何の話か全く聞いていなかったけれど、取りあえず合わせておく。

「いいですよ？」

「おー！ じゃあ、決まりだ。珍しいよな、ノエミちゃんがアフターOKするの。じゃ、今から行こうか。倫子、会計してもらってよは？」

「楽しみだー。カラオケ。何歌おう」

ねー、と優花が市井さんの顔を覗き込んでいる。

「ちよちよちよ！ すみません、いいって言ったのは……ていうか、明日私会社だし！ それにまだ営業中だし！」

私は大慌てでたかやんの腕に手をかけた。

「え？ だって、もうお客さん来ないよ。店長に早く上がっていいか頼んであげるから。大丈夫だって。1時間だけ。それでもまだ終電に余裕で間に合うから」

「え〜」

確かに周りを見渡すと、ラウンジ内には他に2組残っているだけだった。

「優花ちゃんも来るんだし、いいじゃない」

3人の中で1番年上の橋さんが諭すような声色をだす。

「じゃあ……1時間だけ」

「よーし、そう来なくちゃ。倫子、会計してもらって。さて、カラオケボックスに予約入れとこう」

たかやんはそう言って麻のパンツからケータイを取り出した。

オッサン、仕事はやー。

「優花ちゃん、本当にいいの？ 無理してない？ ノルマとかないんだから別にたかやんたちに合わせなくてもいいんだよ？」

早あがりした私たちはロッカールームでさつさとバニーコートを脱いだ。

新人の優花と私はあまり話したことはなかったが、一応先輩らしく声をかけた。

「いいですよ？ ノエミさんこそOLさんなんで大変ですよ。まあ、あの人たちならテキトーに合わせて、テキトーに拍手してれば気が済むと思いますけど。テキトーにさつさと帰りましょうね。終電に間に合わなければタクシー代もらえばいいわけだし」

あ、それでいいんだ……

つい、もてなそうとする私はやっぱり”古い女”なのかな。

「おまたせー」

彼らは明らかに手持ち無沙汰というふうにお店の入り口で立って待っていた。

「遅いな。化粧直してたのか？」

「たかやんのために化粧なんて直さないよ……あ、ごめん、スマホ鳴ってる」

デンワのディスプレイに浮かんた文字を見て私は「しっ！ 静かにして！」と人差し指を唇の上に当てた。

「もしもし？ あー、ごめん。会社の人とご飯食べて。気がつかなかった。うん、大丈夫だって。うーん、忙しいから。週末も。うん、わかった。あ、地下鉄に乗るから。じゃあね」

「はーっ、焦ったあ。お母さんだった」

私たちは有楽町方面へ歩き出した。

「本当は彼氏なんじゃないの？」

橋さんが横から挟む。

「違いますよー。ほら、履歴”お母さん”ってあるでしょ」

私は手にしていたスマートフォンを見せた。

「いるいる、彼氏の名前を”お母さん”で登録するヤツ」

「それをいうなら市井さんは私の番号を居酒屋の名前で登録してるでしょ」

ははは、と皆一斉に笑う。

「もうねー、お母さん過保護過ぎ。外国に住んでるならともかく、3日おきに電話してくるなんてあり得ない。それでね、私が何か口答えするとすぐに『お母さんはあんたたち子供のために今までやりたいこと全部我慢して来たのに』とか『お父さんと別れようと考えたこともあつたけど、あんたたちのことを思って今まで頑張つて来たのよ』って超ネガティブ発言するんだもん。もう呆れて返す言葉が無いってこのことですよね。本当にお父さんと別れたかつたら別ればよかったのに。そうしなかったのは、やっぱり一人だと生活できないとか、世間体とか考えたからだと思うんだ。自分に別れる度胸が無かつたのに、子供に全て責任を押し付けるってちよつと違うと思うんだけど。そう思いませんか？」

私は隣を歩く橋さんに同意を求めた。

「それを言っちゃあ、おしまいよ、ノエミちゃん」

橋さんは私の予想を裏切つて、穏やかではあるけれどやや咎める口調で言った。

「あー、もういいのいいの。お母さんのことは。さーて！ 今日日は歌うぞ！」

私は苦笑するオジ様たちの背中を押して、カラオケボックスの文字が光る入り口を通った。

第二話 あの人とアフター

結局30分延長で23時30分に店の前でお開きになった。

少し急げば終電には間に合う。私は7丁目を有楽町方面に早足で抜けた。中央通りに向かって細い路地を右に折れた時、反対側からまっすぐに歩いて来た人とぶつかりそうになった。角の自販機で死角になっていたのだ。

「すみません」

ちよつとのところかわしたが、男性は短く言っただけでそのまますれ違った。私も急いでいたので気にせず歩き出したが、二三歩足を進めて、ふと、今の声に聞き覚えがあることに気がついた。

いまのつて、もしかして……

自然に足は止まり、私は振り向く。すると、数メートル先で肩越しに振り返っていた相手と目が合った。やっぱり小松だった。ほんの少しの間その視線が絡んだ。

「ノエミさん？ 何してるの？ 今日早あがりでしたよね？」

彼は私に近づいて来た。勤務中は後ろに撫で付けている前髪は、今では目に軽くかかる程度に落ちていて、眼鏡も外した彼はなんか無邪気に見えた。

「あ、たかやんたちとカラオケに行つて。小松さんは？」

「え？ オレは普通に仕事上がりですけど。……あ、ノエミさん腹減つてない？ オレ、今日まかない食べ損なつたからめっちゃハラヘリで。どう？ 飯喰いにいかない？」

彼とともに話すのは始めてだったが、こんなにもくだけた口調で話されると今までの彼のイメージは何だったのかと内心軽く驚いた。

「私、明日仕事だし、もう終電ぎりぎりだし……」
「奢るよ？」

どつする？ と言うように彼が顔を傾けた。

「ていうか、人の話聞いてないでしょ。奢る、奢らないとかじゃなくて、帰らなきゃっていつてるの。ていうか、そっちこそ終電逃すわよ?」

「んー、今日はちょっと飲み明かそうかと思って」

少し彼の表情が曇ったように見えた。

「一人で?」

「まあ、ノエミさんが来ないならそうなるね。じゃー、ほんとに急いだ方がいいよ」

そういつと彼はくるりと体の向きを変えて新橋方面に向かって歩き出した。

気になる男に誘われて行かなくてどーする

本能の出すGOサインが目の前でちかちか点滅していた。

「お、奢ってくれるのね?!」

その瞬間、私は小松の背に声を投げかけていた。

彼はゆっくり振り返った。

「いい店、知ってるんだ」

私は彼の口元に、営業用ではない笑みが浮かぶのを始めて見た。

店の名前が黒々と太字で酒樽に書かれ、入り口を飾っていた。小

松は頭を少し低くして縄のれんをくぐった。

外装よりも、中はこぎれいで思ったよりも広かった。

「こんばんは」

白木のカウンターの後ろで紺色の作務衣を着たおじさんが通る声で言った。私たちがカウンターの隅に座ると、カウンター越しにおしぼりがすぐに出て来た。小松はその場でビールを2本頼んだ。

「ここ、手羽先がうまいんだ」

そう言つとメニューに目を落としてしまった。

私は横を向き、店内を見回した。平日で、日付が変わったばかりの店の中にはホステスと客という組み合わせ、明らかに”普通の”仕事に就いていないだろうスーツの男たちがまばらに席を埋めていた。

ビールがくると形だけの乾杯をした。

「おつかれです」

「あ……お疲れさま」

思わず「いらつしゃいませ」と言いそうになる。こういつのつて職業病つていうの？

彼は板前に適当にいくつか料理を頼み、きゅうり揉みとじゃこのお通しに箸を付けた。まるで私がそこにいないかのように彼はビールグラスを傾け続けた。その横顔を盗み見ながら、やはり彼は店で見せる姿通りつまらない男なのではないのだろうか。付いて来たことはそもそも間違いだっただではないかと思ひ始めた。注文したものがいくつか来たあたりで、痺れを切らして私は聞いた。

「ねえ、どうして一人で飲むつもりだったの？」

彼は箸を持っていた手を止め冷めた横目でちらと私を見ただけで、一口大に切られた分厚いさつま揚げを口に運んだ。

「もしかして、ゆりえに振られたとか」

彼は今度は大きく目を見開いた。

「凶星？」

「……まあ、振られたのは事実だけど、」

彼は意外とあっさり認めた。

「でも、ゆりえさんじゃないよ。なんでそこでゆりえさん？ 大体彼女、吉沢さんと付き合ってるだろ」

「そうなの?!」

ゆりえの指名客の名前に私は驚いた。今日はサプライズが多い。

「知らなかったの？ ちょっとよく見ればわかるよ。ノエミさんは

周り見なさすぎなんじゃないの。まあ、そういう方が平和でいいけど」

「なんだかその物言いは馬鹿にしているように聞こえた。私はいささかムツとした。」

「いいでしょ、別にゆりえに興味ないし。それに私の名前はノエミじゃなくて江美子です。神田江美子」

「ふうん。笑う子？」

「ううん、さんずいにカタカナのE、に美しい。美しいかわ、よ。そつえば小松さんつて下の名前なんていうの？」

「順也。順番のじゅん、にナリ」

「ふうん」

「今度は私が鼻を鳴らした。小松のフルネームを手に入れただけで、少し胸が騒いだ。」

「あー、話し戻るけど小松、振られたんだ。なんで？ やけ酒に付き合つてあげるんだから語つてよ」

「振られた、と聞いてなんだか気を良くした私は、石崎と同年代、つまり自分とタメの男をすでに呼び捨てにしていた。自分も料理に箸を付ける。う、この小アジの南蛮漬け、美味しい……。」

「終わったことを語つてどーすんだよ。まあ、最近はもう疎遠になつてたしな。聞きたいなら話してもいいけどさ……」あなたはこのこと全然わかってない”って言われた」

「彼は二本目のビールをグラスに注ぎ、私にも注ぎ足した。」

「なにそれ。私も全然分らない。もつとちゃんと分かるように話してよ」

「私は彼ににじり寄つた。ついでに彼の前の手羽先に手を伸ばした。「オレ、今院生じゃん。実はもう内定決まつて、たまに会社にも顔を出さなきゃいけないわけ。学校の研究と会社つてかなり時間的につらいんだよ。で、なかなか彼女と会えなくて。それでも年が明ければ学校も楽になるし、二週間くらいまとめて休みがとれるから、そのとき埋め合わせるって宥めてただけど、」会いたいときに会

えない彼氏は彼氏じゃない』だって。嘘だろー。無理なものは無理だつっの」

小松はそのときの状況を思い出したのか、少し顔を歪めてグラスを煽った。

「やっぱりシヨクなわけ？」

「そりゃそうでしょ」

小松はジトツと横目で軽く睨んだ。

「えー、でも私、その気持ちわかるなー」

「なに？ 女ってみんなそうなの？ 『仕事と私、どっちを取るの』なの？ 古いだろ。そんなの」

「いや、全員がそういうわけじゃないと思うけど……小松の彼女って学生でしょ？」

「そうだけど」

「じゃあ、付き合ってるのに会いたいときに会えないのってやっぱり納得がいかないよ。後でまとめて二週間とか、意味無い。とにかく会いたいときに会いたい。仕事がいかに理不尽で、それでも組織の一員として、流れに乗って動かなきゃいけないってことはやっぱり社会に出ないと想像出来ないんだよ」

「おお、さすがにOLの意見は違うね……そうか、うーん……悪いこと、したな……」

「小松が反省してる……」

突然、彼は眉間に軽くしわを寄せた。

「神田さんねえ、さつきから小松小松って呼び捨てにしてるけど、オレ、26だから。石崎とは同じ院生だけど、あんたより3つも年上だからな」

「えええ！ 嘘！ どんだけ留年してんのよ」

「あんた、どんだけ人のこと馬鹿にしてんのよ」

彼は苦笑しながら私の口調を真似た。

「二年休学して留学したからさ。それよりなんで神田さんこのバイトしてるの？ 昼間はOLなんだろ」

「お金欲しいからに決まってるでしょ。新しい服や靴、バッグはいくつあっても困らないし、エステにだって行きたいし、爪だって綺麗に塗ってもらったらすごく特別な気分になるもの。女に生まれて来たんだから、”華”である今を楽しみたいもん。それにはお金がいるの。わかるでしょ？」

彼はそれには答えずに、また嫌な感じの横目を流した。

「彼氏、いるの？」

「いないけど、セフレなら一人」

何を正直にしゃべっているんだろう、言ってから自分に呆れた。

一つ正直に打ち明けると、聞かれてもいないのに次の瞬間にはもう勝手に言葉を繋げていた。

「クラブで知り合ったんだけどね。キョーコも知ってるコなんだけど。二つ年上で、テレビ局に勤めてて、生活が不規則だから彼女はいらないんだって。でも、やっぱりヤルことはやりたいらしくて。で、私もダブルで仕事してるでしょ。毎週毎週デート、どこに行こう、とかそういうのちよっと勘弁で。なんだかんだ利害一致っていうの？　そういうところが合って、もう半年くらいの関係かな。あ、でも彼ひとりだけね。なんかあったとき困るでしょ。まあ、そのところは気をつけてるけど」

ちよつと調子に乗ってしゃべりすぎたかな、と思ったが、どこかでものすごくすつきりしている自分がいることも否めなかった。誰かに聞いて欲しかった。この生活が正しいのか、自分が本当に求めている生活なのか自信が無くなって来ていたのだ。だから、もし誰かに「何やってるの？　おまえそんなんでいいの？」と言われたら、もっと別の生活にシフト出来るかもしれないと思っていたし、考え直せるかもしれない。

でも、何を、どうしたら？

彼は私を見ていた。その思慮深い瞳からは何も読み取れなかった。

「なんだ、神田さんて普通の、今時の女だったんだ」

私は絶望に近いものを感じた。

そう、私は特別でもなんでもない”普通の”、”イマドキの”女だった。ただそれを再確認させられて、少し情けなくなった。私は彼に何か期待していたのだろうか。

「楽しいの？　そういう生活」

「超楽しい」

つまらない、と言えば自分を否定しているようで、これ以上自分が惨めにならないよう、虚勢を張った。

「じゃあ、いいんじゃない。自分が満足してれば」

彼は水割りを頼んだ。そして、でもさ、と言葉を継いだ。

「そうやってスケジュール帳に詰まった予定に次々とバッテンで消すだけの日々を送っていると、いつの間にか電車はスピードをどんどん上げて、いつの間にかとんでもないところに行つて、さて降りようとしたらMind the Gap、ホームと電車とのあいだがぼつかり広がつてさ、降りられなくなるぞ」

Mind the Gap、の所だけ妙に発音がよかつたから、聞き取れなかつた。

「え？　何？」

Mind the Gap、と彼はもう一度言った。

「線路とホームの隙間に気をつけてください、っていう電車のアナウンス。ロンドン名物みたいなもんだ。チューブのロゴにテキストがTシャツになつて土産屋に並んでるぞ。でも、オレその言葉好きなんだよ。人生にも言えるんじゃないか、つてあつちでそれ聞くたびに哲学してた」

「それにさ、そんなにたくさんの方に埋もれてると、本当に何が欲しいのかわからなくなるじゃない？　本当に欲しい物は、何かを捨てないと手に入らないよ」

ふーん、そういうもんかな、と私は曖昧に流した。説教臭くはなかつたが、ちくりと痛いところを突かれた、そんな気がした。それでも、なにか引つかかるものはあつた。

「あ、それよりも、ねー、なんでお店では女の子たちと口聞かない

の？ 小松さんに構ってもらいたいってコ、結構いるよ」

「そう？ なんかみんな同じ格好していると同じに見えるんだよねー。話つていっても別に共通の話題無いし。それに、」

彼はそこで言葉を区切ると、ちよつと嬉しそうになつと口の端を上げて私を見た。

「胸の谷間見せられながら話しかけられたら、ずっとそこばかり見ちゃうだろ。なんか、やばいよな」

なんだ、そんな理由で。私は手酌で残りのビールを注ぐと、一気に飲んだ。

それから大した話もせず、店を出た。

「ごちそうさまでした、小松さん」

約束通り彼が全て支払った。

「あー。うん……あと、はい、これ」

彼は財布の中から札を何枚か抜き取って私の手の中に押し込んだ。

「何これ？」

「タクシー代」

「い、いいよ。私小松さんより稼いでるんだし」

「取つとけつて。アフター付き合ってもらつたんだから。それにまあ、一応振られたシヨックも和らいだことだし。ノエミさん感じのいい指名客が多いの、分かる気がした」

じゃあな、と彼は近くを通つたタクシーを止めて、乗って行つてしまった。

なにそれ。

いきなり知らない場所に置き去りにされた子供のような寂しさを覚えた。

彼の部屋へ誘われるとか、ウチに誘い込むとか、そういうことを考えていたわけではないが、このあまりにもあつさりした別れにいささか屈辱感を感じないはずは無かつた。

私はタクシーをつかまえ、

「代々木上原まで」

行き先を告げた。そこにはさっき話題にあがったヒサトの部屋がある。

第三話 感傷から生まれるもの

『銀座のバニーガール』が道の真ん中に置き去りにされた屈辱。それを手っ取り早く埋めるとしたら、物理的に男の体しかない。

小松のくれたタクシー代でヒサトに部屋に行くことに後ろめたさは無かった。だいたいこんな気持ちにしたのは小松の方だ。

小松の開けた穴をヒサトが埋める。

自分を寂しいままにしちゃいけない。だって、誰かにすがりたくなる気持ちは頭をもたげ始めるから。家族なり、彼氏存在なり、そういうものが欲しくなりそう。自分が小さく、弱いと認めるよくな付属品は出来るだけ遠ざけておきたかった。私は、自分一人でやっていける。誰にも頼らずに、自分で。欲しい物は手に入れるし、実際手に入れている。

私はスマートフォンをバッグから取り出し、ヒサトの名前の上をタッチする。

「あ、私。今から行くから。え？ 別に……いいでしょ？ すぐに着くわ」

小田急線の踏切の近くで降りた。彼の家と反対側のコンビニで下着、ストッキングと歯ブラシを買った。そこから彼の部屋は5分ほどだ。

「どーしたの？ こんな夜中にさあ」

ドアを開けた彼の横を、私は何も言わずにすり抜けて部屋に入る。「んー、したくなつたから」

私はクロゼットから勝手にハンガーを出して上着とブラウスを脱いで、スカートを掛けた。キャミソールとショーツという格好でも、

ヒサトの前では恥ずかしくは思わなかった。そういう「恥じらい」とか「見つめ合う」部分を省略出来る男がいるって、便利だと改めて思った。目的だけを果たせる……。

彼は戸締まりをしてベッドの端に座る。Ｔシャツにスウェットパンツという出で立ちで、明らかに既にベッドに入っていたようだ。

「起こしちゃった？」

私は彼の前に立って、少し痛んでいる茶色い髪を指で梳いた。

「んー。さっき帰って来てちょうどベッドに入ったところだった」

彼は私のウエストの曲線に手をかけた。

「あ、シャワー使うね」

私はするりと彼の手から逃げた。

私がバスタオルを外して彼の隣に潜り込むと、彼は私を抱きしめ、体に足を絡めた。彼の、意外と逞しいすべすべの胸が私の左側にぴたりと吸い付く。

「なんでＴシャツだけ脱いでるの？ 全部脱いでよ」

私が顔だけ横に向けて言うと、彼は私の好きな、人懐っこい笑みを浮かべて済まなそうな声を出した。

「悪いけど、今日マジで仕事ハードだったから、ムリ。明日も、つて、もう今日か、朝6時入りなんだよー」

彼は私の首筋に顔を埋めつつ、片手で私の胸をそっと包んだ。

「あー、朝のあの番組ね。日曜の総集編ならたまに見るよ。最後のクレジットタイトルが流れてヒサトの名前があると『ああ、まだクビにされてないんだ』って安心するよ」

「ひでーな、それ。まあ、でもそういうことだからゴメン。オヤスミ」。江美子、あつたかくてキモチ」

そう言っただけで彼は本当にすぐに寝息を立て始めた。

何それ……セックス無しで成り立つ関係じゃないでしょ、私たちの間は。これじゃあ、まるで……私は小さくため息をついてまぶた

を閉じた。

ヒサトは会った時から機嫌が良くて、さっぱりした男だった。

渋谷のクラブ”F”と言ったら、ドラマでも使われたこともあつてかなり名の知れたクラブだった。ここに来れば皆”特別になれる”という勘違いさんたちが集まっていたのも事実だった。キョーコと私は一時期そこにハマっていて、土曜日は毎週のように通っていた。人が多すぎて入場制限されている横を、顔パスの私たちは羨望のまなざしを受けながら抜け、それでも得意顔になるのを極力抑えながらエントランスの赤い絨毯を歩いたものだった。

ヒサトはフロアですごく目立つ男だった。身長が186? (後から聞いたんだけど)、明るい茶髪、丘サーファー丸出しのナリで、ノリもよかった。いつも女の子に囲まれて元気に踊っていた。

来るたびに何度か彼を目にしていたけれども、実際にアクションを起こしたのはキョーコだった。

「なんかあの子カワイイー。引っ掛けてくるわ」

もう何杯ワインを飲んだのだろう。しらふの時でさえ押しが強い彼女はさらに気が大きくなったのか、それでも8センチのヒールで、しっかりした足取りで彼の前までまっすぐに歩いて行った。しばらくして彼女は彼の腕に自分のを絡めて私のいるカウンターに帰って来た。

「ヒサト君です。そしてこちらが、えみこです」

それから彼の友達のユウタも交えてバーで飲み、踊った。

クラブで。陽気な音楽と、揺れる照明と、お酒。みんな上機嫌で。飲んだら踊れー、踊らないなら帰れー」

キョーコの妙な標語に煽られて私たちはフロアの一角を周りにいた人たちごと占領していた。

Boogie Wonderlandのサビでヒサトは私の手を取ってくるくると回した。

Space Cowboyで宇宙に飛んで、That's the way、Ah Ahとみんなは両手を上げ”フィーバー”し、Jumpでヒサトは本当に飛び跳ねた。大好きなYou are the Universeがかかると、私は頭を反らし、うっとり目を閉じた。

その夜は笑って別れたけど、次に会ったとき、彼はバーで「これからウチに来ない？」と私の耳に口を寄せた。

私は少し考えるフリをして、それから「いいよ」と答えた。

人の動く気配で目が覚める。部屋はまだ薄暗くて、一瞬自分がどこにいるのか分からずに、記憶をたぐり寄せた。

「あ、起こしちゃった？ おれ、もう出るからさ。鍵、新聞受けの中から部屋に入れておいて」

彼はジーンズに片足を突っ込みながら言った。

「ヒサト……私、もう電話しないから」

彼はファスナーを上げていた手を一瞬止めて、驚いたように私を見た。私は彼の、軽く割れた腹筋を見つめながら、ああ、やっぱりこの人とのセックスは良かったな、と考えていた。

「何それ」

彼はTシャツをかぶり頭を出すと、ベッドに腰掛け私を見下ろす。

「男が出来た？」

「んーん。何かを手に入れるには、何かを捨てなきゃだめなのよ」
「捨てるって、ひでー言われようだな」

あ、ごめーん。私は毛布を口元まで持ち上げた。ヒサトの匂いがした。彼は手を伸ばして私の頭をそつと撫でた。

「好きなヤツ、出来た？」

「うん」

聞かれると、素直に答えられた。そうか、と彼は言った。

「ねえ、” You are the Universe ”、覚えてる？ よく一緒に踊ったよね。私、あの曲好きなんだ。メロディも詩も」

彼は遠くを見るように少し目を細めた。

「うん。……おれも好きだった……あ、もうマジで行かなきゃ」

彼はフライトジャケット風の青い上着を羽織り、玄関にかがみ込んだ。背中を向けたまま彼は言った。

「いつでも電話して来ていーぞ」

「それ、呪いでしょー。うまく行かないっていう」

私はベッドの中から返した。

「まー、頑張れ」

金属の扉が閉まる前に、彼の言葉が隙間から滑り込んだ。

男の部屋に来て、セックスをしない。

今まで無かった例外に、肩すかしを食らったような気持ちでありながらも、なぜかその行為をしなかったヒサトに好感を抱いた。

彼は恋人ではないが、男の体がびたりと女の体の重なるべき部分に重なり、男の湿った体温に包まれ、肌を刺激される。自分の中に入った彼から流れる甘いパルスに体は化学反応を起こし、ため息を生み出す。高揚を味わい、昇り、ゆっくり沈む。

ヒサトとは生理的にはいつも満足していたけれど、その行為の後はいつも心のどこかに、” 欠けた部分 ” が、ペン先から一滴だけ落ちたインクの染みのように黒々と浮き上がってくるのだ。

それが、セックスをしなかった今朝はかえって” 穏やか ” とか” 充実 ” に近い感情で瑞々しく満たされていた。

不思議。

私はもう一度シャワーを浴びると、ベッドと身支度を整えた。歯

を磨いて、歯ブラシは捨てた。入社にはまだ少し早いけれど、どこかで朝食をとらなきゃいけなかったし、”昨日と同じスーツ”が他の女子社員の目に触れて、ネタになるのはご免だった。さっさと制服に着替えないと。

私はカーテンを通してやっと明るくなって来た部屋を見回す。そして自分の残留物が無いことを確認するとそこを出た。鍵はヒサトに言われた通り、新聞受けから落としたりした。

会社と、お店と家。

毎日相変わらず行動範囲は限定されていたが、週末の過ごし方が変わった。

サロンのパスが切れても更新しなかった。そのかわり、一人でふらりと映画に行くようになった。街にショッピングに行く数が減り、スーパーで買い物をする。部屋の小さくて不便なキッチンで自炊に励むことが多くなった。

部屋も徹底的に片付けた。積んであったファッション誌を最新刊だけ残して紐でくくり、二層になってどろりとしたネイルカラーの数々の小瓶を捨て、1?ほど残ってそのままだった化粧水や、使っていないファンデーションのケースや、色の合わなかったレフィルも捨てた。クロゼットの休眠物になっていた大量のバッグや服を袋に詰めて、セカンドハンドに持って行った。賞味期限切れの食材や調味料も捨てた。部屋に、クロゼットにかなり空間が出来る、自身も身軽になった気がした。

実家にも久々に帰った。

あれだけ鬱陶しいと思っていた母親だったけれど、一緒に買い物に付き合い、コーヒーショップでケーキをつつきながら他愛も無い会話をあだこつだと交わし、お父さんの悪口など聞いていると、母は本当に嬉しそうな顔を見せた。そんな彼女を見ていると、ふっ

と、” ああ、案外寂しかったのかな” なんて少しは気持ちがわかる気がした。

ただ側にいれば自然とそういうことが分かる。それが家族なのかな。

他人はただ側にいたってその気持ちを分かることは容易ではない。

店で週三回顔を見る小松は、居酒屋で飲んだ夜から一ヶ月程経つたのにも関わらず、以前と全く変わらぬ態度で働いていた。それどころか、以前よりも私に対する態度はさらに温度が低くなっているように思えた。交わすのは挨拶のみ。

自分の気持ちに気がついていたらけれども、自分にそんな態度を見せる彼に対して私にはなす術がなかった。負ける勝負には手を出さない。そうすれば自分が傷つくことは無い。そんなふうには、いままですつとやって来た。そして、それは間違っていないはず。

秋の風は湿った、冬の冷気を含んだ手で私の顔を撫でた。

今年の冬は寒くなりそう……………身も心もね。

私はバニーコートを脱いだ開放感に浸りながら、頼りないネオンのみゆき通りをほろ酔いのサラリーマンたちを追い越し、歩いた。

第四話 指名、そしてお持ち帰り

週末、ランチを一緒にどう、とキョーコから誘われた。日比谷で待ち合わせし、ぶらぶらと店を冷やかした後に歌舞伎座の裏の庭付きの和処に入った。

「夜はそうそう来れないんだけど、ランチのお弁当はお手頃なの」キョーコは塗りの弁当箱の蓋を開けながら言った。いくつかの区画に区切られた弁当箱の中身はそれぞれに小さな世界が目を楽しませた。

「ねえ、経理と何かあったー？」

彼女は何の前触れもなしに切り出し、すつとおちよこに口を付けた。

「え？ どうして知ってるの?!」

言うてからしまった、と思ったが遅かった。私は口に入れた”里芋の柚子みそがけ”をよく噛まずに飲み込んでしまった。

「好きなんでしょ？ 悪いわね、ちよつとカマかけさせてもらったよ。あのゆりえの話で」

「あ！ あれ全然違ってたじゃない、経理に言ったら変な顔されたのよ！ ひどーい。騙したの？」

「だって、あんたすぐに食いつくんだもん。経理に興味が無かったら流す話でしょうに。だから、あんたが経理に気があるって確信しちゃった。で、いつ経理と話したの？ いや、なにも重箱の隅をつつくつもりじゃないんだけどおー」

私は彼と居酒屋で飲んだ話を打ち明けた。

「それでも、それから一言も口聞いてないし。そういう意味では何か”あったけど、結局何も無いよ”」

「って、あんた、ヒサトのことも話したの？ そりゃー、引くでし

よ。普通」

彼女は呆れて言い、銚子を上げてもう一本頼んだ。

「いいの。もう。それにヒサトとも連絡とってないし」

「なんか、あんたって不器用っていうか……もっとうまくやればいいのに。ヒサトのことも、経理のことも。たかが男と女の微妙な遊びなのにさ」

「不器用なんていわないで、『ピユア』って言って欲しいなあ。それに、私にとっては遊びにしたいくないんだもん。もっと、大事にしたい感じ……」

「本気なんだ」

「本気だから手も足もでないのよー。こんなピユアな私に自分でもビックリしてるところ」

私は話を打ち切り、食べることに集中した。キョーコもゆっくりと箸を動かし、しばらく黙って食べながら私たちは別々のことを考えていた。

「そうなんだあ……でも、経理、あんたのこと好きだよ」

再び話を蒸し返したのはキョーコだった。私は飲んでいた玄米茶を吹き出すところだった。

「あのねー。それ、あり得ないから。キョーコはスキャンダルが好きだけど、それはお客さんとバニースの間に限定してよ」

「キョーコレーダーを馬鹿にしないでくれる？ あのね、ちょっと前から経理、あんたのことずっと目で追ってるわよ？ それにあなたの着く席にはっかりマメに灰皿替えに行くのよ。偵察？ っていうの？ ああいうの。こっちの客の新しいグラスは後回しにしても気づいてなかったでしょ？」

「嘘」

お茶のおかわりを注ぎに来た仲居さんに湯のみを出しながらも、キョーコの顔から目が離せなかった。

「そんなことで嘘ついてどーすんのよ」

「でももし、その嘘が本当なら……嬉しいかも……」

「でしょ？ ていうか、嘘じゃないってば、しつこいな」
キョーコは得意げに尖った鼻をくつと上げた。

「ああ、でも経理、今月いつぱいでお店辞めるらしいよ」
「なんでキョーコが知ってるの?! ていうか、その話の後でそんな大事なことさらつと言われても!」

「石崎さんから聞いた。……でも、だから、なんとかしなさいってことよ。どうにかしたいのなら」

キョーコはほんのり頬を染めて、嬉しそうに私を見ていた。今日はこの美しい同僚が、天使にも悪魔にも見えた。

やばい。

喉が痛い。頭が重い。熱を測れば大したことがなかったが、体の節々が軽く痛んだ。

まあ、今日頑張れば二日は寝ていられるんだと、出社はしたものの、退社する頃には熱がそこそこあがって来た模様。

会社を出てすぐにお店に電話した。

「ええ?! ノエミちゃん、今日金曜だよ? それも給料日後の金曜日。困るよー。日下さんで団体ご予約入ってるのよー!。ノエミちゃん指名なんだから、来ないと日下さんのメンツがないでしょ。頼むよ」

『頼むよ』といいながらも、”休むことなど論外”という店長の激しい口調に、ただ、はい……としか言いようが無かった。

「ノエミさん、ちょっと」

バーの前を通るとき、グラスを磨いていた小松に小声で呼び止められた。ぼーっとしていたこともあり、まさか自分が呼ばれたと思わなかったので、素通りし、あれ、と振り返ると彼は得意のちよっ

と困ったような顔をして、手招きした。

「なんですか？」

私はカウンターにもたれるようにして彼の前に立った。彼は少し顔を近づけた。

「おれ、今月いっぱい辞めるんです。短い間でしたけど、お世話になりました」

私は彼の顔を目だけ上げて見た。眼鏡の奥の瞳はいつもと変わらず、淡々としていた。

「あ……そうですか」

それだけ言うのが精一杯だった。

「ノエミさん、大丈夫ですか？　なんか、ぼーっとしてませんか？」

「いえ、大丈夫です………」

私は顔を上げて今度はしっかりと小松の顔を正面から見た。

「あの………」

「なんですか？」

彼は穏やかに言う。私は彼のまっすぐな視線に耐えられずに、バーの照明を鈍く反射する磨かれたカウンターに目を落とした。

「なんでも、無いです………」

私は逃げるように、その場を離れた。自分が彼に何を言いたかったのか、実際、分からなかった。お客様の席に着けば驚くほど饒舌に話せるのに、肝心な人の前では、心の回線がショートしてしまっただよつで、言葉を繰り出すレセプターに信号を送ることすらできなくなっていた。

席に向かうキョーコとフロアの入り口ですれ違った。

「どうにも、ならなかったよ」

「え？」

腑に落ちない彼女の振り向いた顔を目の端でとらえたが、私はそれ以上何も言わなかった。仕事しないと。

給料後の金曜とはいえ、今日はオープン時から攻撃的な混み様だった。バニーズの数もギリギリだった。

「私が黒のバニーコート着ると、なぜか店が混むと言うジंकクス？」
キョーコがトイレで頬にチークをぼかす。

黒のバニーコートは勤続年数3年以上か、月指名40本以上とらないと着させてもらえない。つまりキョーコは後者ってこと。

「ちよつとー、今日私熱あるのにこんな日に着ないでよー」

「ごめーん。なんか気分だったんだもん。でも、あんたしよっぱなから指名入ってるわよ。稼いでこいー」

うー、と唸りながらトイレを出る。せめて楽な席に着かせてもらいたいわ。

しかし、今日の私には何のバツゲームか、ハズレの席ばかりに送り込まれた。つまり、お客様たちが勝手に盛り上がって、バニーズは座ってにこにここと相づちを打てばいい席ではなく、どちらかというと接待で探り合いのお客様、つまり共通の会話があまりなく、そこはバニーズがなんとか話題を提供して場を盛り上げなければいけない、そんな面倒くさい席にばかり着いた。指名もかなり入ったが、やはりどのお客様の前でも必死で笑顔を作っていなければいけなかった。どんな時でも。それが私のバニーガールとしての信条だった。

日下部さんの席で、風邪気味だというと彼は「じゃあ、僕の隣で座ってるだけでいいから」と、一時的な“休憩所”を作ってくれた。それはすごく助かった。

日下部さんはもう一年くらい前から指名をしてくれている。若くて、とっても彼の正確な年齢を知っているわけではない。同僚の間宮さんは、40手前って言った。薬品会社の海外コミュニケーション部のチームマネージャー、って頂いた名刺には書いてあった。外国の方を連れてくることが多いのも頷ける。

整った顔立ちで、優しく、テニスが趣味で。バニーズの中にそんな彼、「かべちゃん」のファンも何人かいた。

後半に入るにつれ、入り口には待っているお客様の列も出来た。

そんな時バニースはトイレにもほとんど行かせてもらえなかったが、私はなんとかチーフの目を盗んでトイレに駆け込み、一息ついた。頭ががanganしていた。帰りたかったが、まだ指名が入っているとチーフに言われたばかりだった。

「ノエミちゃん、そこにいるの？！早く出て来てよ！！」

チーフがトイレのドアを強く叩きながら、殺気立った声を出した。「は、はい。今行きます」

私はパウダーをはたき、グロスを塗り直してお客様で溢れる、酒気と熱気のこもったフロアに出た。

バーの前で、席からグラスを集めて来た小松とすれ違った時、彼は肩越しに低い声で言った。

「大丈夫か？これで指名最後だから、がんばれよ」

この瞬間、たぶん、キョーコのあの『嘘』は本当だと、確信した。恋をしていると、好きな人の声のトーンや、瞳に浮かぶ熱や色の深みが私に様々な信号となって伝わる。

今の彼の気安い言葉。それは私の求めていた信号だった。そして、彼もその返信を待っているはず。じゃあどうすれば？でも、今の私の頭ではなにも思いつかなかった。

「こんばんは、ノエミです。日下部さん、本日二度目のご指名、ありがとうございます」

最後の指名は再び日下部さんのところだった。呼びもどされたのだ。

「もー、カベがどうしても、ってゴネるからさー。ノエミちゃん、しつこくてごめんねー」

すっかり出来上がっている間宮さんがソファに振り返って豪快に笑った。私はそんな彼に今日、すでに顔に張り付いてしまった営業スマイルで答え、倫子と入れ違いに日下部さんの隣に座った。ほかのお客様はバニースが上手に盛り上げていた。

「ノエミちゃん、辛そうで悪いんだけど、座っててくれるだけでい

いから」

日下部さんは済まなそうに私の顔を覗き込んだ。

そう思うなら指名なんてしないで早く帰らせてよー。と内心思いつつ、それでも

「大丈夫ですよ。ありがとうございます。日下部さんて本当にやさしいですね」

と、笑みを返した。

「だるかったら、僕の方に寄りかかってもいいし……」
控えめだったが、それは彼の切実な願いとも取れた。

「いえ、本当に大丈夫です。それに上着に香水が移っちゃうと、奥様、気にされますよ?」

女性はそういうところ、敏感ですから。

「え? ノエミちゃん、カベ、バツイチよ。カベも今までそんな肝心なこと、言ってなかったの? なんだか奥手と言うかエエカッコしいというか、今どきなあ、」

と、間宮さんは呆れたようにその言葉を隣の愛里に振った。愛里も「そうですねえ、そこアピール大事ですよねえ」と合わせている。「だから安心してカベに甘えるように」

と、間宮さんにくつと体を押され、結局日下部さんにもたれかかるようになってしまった。ここで頑に拒否するのも彼に申し訳ないと思い、その席にいる間中、彼に寄りかかっていた。

日下部さんたちのお見送りが終わり、やっと解放された。チーフは後少し、ラストまで働かせたかったようだが、取りあえず指名をかなり取ったことも助けて私に帰宅許可が下りた。もう、ふらふらだった。急いでロッカールームに向かう。バーの前で小松と一瞬目が合ったが、彼はそれをすぐに逸らせた。そして

「お疲れさまです」

といったものに素っ気なく言った。さっきのような親しみのこもったそれではなかった。

どうして?

私は混乱しつつ、ロッカールームに入るとバニーコートのアスナ
ーを下ろした。体中が熱かった。

お店のドアを出て階段を下りながら、お客様を見送って店に戻る
ほかのホステスたちとすれ違う。彼女たちの酒と香水の残り香に眉
を寄せた。

「……！」

必要以上にきらびやかで嘘っぽい装飾のエントランスのロビーに
見覚えのある後ろ姿を見つけた。日下部さんだった。彼は一人で煙
草を吸っているようだった。もしかして、私を待ってる？ こんな
ことは初めてだった。

どうしよう。

私はほかの女の子が出て来るかとお店の方を振り返ったが、ラス
ト間近で、あの混み様で上がれるわけが無い。私は大目に見てもら
ったのだ。仕方が無い。スマイルでごまかしつつ振り切ろう。覚悟
を決めて階段を下りていくと、彼は人の気配に振り向く。

「あれ？ 日下部さん？ どうされたんですか？ タクシー待ち？」
私は初めて気がついたかのように声を上げた。

彼は俯き、まさに『照れながら』という言葉がぴったりな仕草で、
隣にある灰皿にタバコを押し付けた。

「ノエミちゃん辛そうだったから、迷惑でなければ送らせてもらお
うと思つて……」

彼の顔に『酔い』は見えなかった。だから反って怖かった。

「本当に大丈夫ですよー」

私はわざと明るく、水商売の女丸出し笑顔で答えた。頼むから大
人しく一人で帰らせてー！

「いや、でも顔赤いし……熱があるじゃないか」

ぐっと近づいて来た彼に素早く手を取られたまま固まってしまふ。
まじめで、切実な男の人ほど、一度思いつめるとこわい。有無を言

わさぬものが彼の表情にはあった。

「さ、行こう。まだこの時間ならタクシーはすぐにつかまるよ」

え、と……頭が重くて、気の利いた言葉は浮かんで来なかった。引きずられるようにしてエントランスを出かけた、そのとき。

「ああ、間に合った！ ノエミさん、石崎が店の車出しますよ。店長が送ってやれって……あれ、日下部様？」

さっき聞いたばかりの素っ気ない声。今のだってただの業務連絡だ。でも……小松、助けて！！ 私は振り返り、必死に彼の目に訴えた。黒いベストの制服姿の小松は大きく膨らんだゴミ袋を手に、階段を下りてくるところだった。その、私を見る彼の瞳はやはり冷え冷えとしていたが、それでも静かに私たちに近づき、日下部さんの目の前に立ちはだかった。

「ノエミさんはウチの石崎が送っていきますので。日下部様、お帰りでしたら僕がタクシーをつかまえてきましょうか」

静かではあったが、その声の響きには逆らえない迫力があった。

日下部さんは小松から視線を外しながら曖昧に頷いた。

「あ、じゃあノエミさんこれ、捨てて来てください。すぐに石崎が来ますから」

そういつて小松は私にゴミ袋を押し付け、背を軽く押してゴミ捨て場に行く裏口へ促した。そして素早く私の耳元で「裏口で待つてろ」と囁いた。

バカみたいに素直に、言われた通りゴミを捨て裏口のドアの前でしゃがみ込んだ。もう、立ってられないほど頭痛はひどく、脚に力は入らなかつた。

小松を待っている時間が永遠に続くような気がした。それでも多分その間数分だったのだろう。やがて待ち人の足音が近づいて来た。

「神田さん、大丈夫？ 日下部ならもうタクシーに乗せたから。おまえ一人で帰れないだろ、それじゃ」

私はストッキングに包まれた膝におでこを押し付けながら、上から降り掛かる声にぶつきらぼうに答えた。

「おまえって言うなー……。放つといて……。少し休めば大丈夫。それに、石崎さんお店の車出してくれるんでしょ？」

ため息がひとつ、落ちて来た。

「嘘に決まってるだろ。あのケチな店長がおまえだけを送って行けなんて言うわけがない。おれがゴミ捨てに下りたら、あいつがおまえに絡んでたから……」

ああ、小松はやっぱり機転を利かせて助けてくれたんだ。私は初めて顔を上げ、中腰になっている小松の顔を見た。正確には、見ようと目を凝らしたが逆光の上、熱で視界がぼやけていて彼がどんな顔をしているかなんてわからなかった。

「おれ、戻らないとマジ、叱られる。ま、もう辞めるからどーでもいいんだけど。おまえ、ちよつとこつちこい」

小松は私の両肘を引っ張り上げた。その勢いに乗ったまま、小松の胸に思い切り顔から突っ込んだ。

「おつと。おまえ、ふらふらじゃん。行くぞ」

どこへ？ 疑問が声になる前に彼は私を抱えるようにしてビルを出た。そして向かいのビルに入り、エレベーターのボタンを押す。彼はそのあいだずっと、ライトベージュのトレンチコートの上から肩を抱いていた。

どこに連れて行くつもり？

小松に寄りかかったままの私の頭に、『このまま時間が止まってくれたらいいのに』と、この状況で定番のフレーズが浮かんだ。

第五話 逆指名

小松が私を連れ込んだのは、そのビルの2階のカフェだった。

店内はアンティーク調で、バーの上にはスズランの花のようなランプがひとつずつ天井から下がり、小さな明かりを落としていた。

「あれ、小松君」えび茶色のチョッキに白いシャツのマスターが声をかけた。

「こんばんは、佐伯さん。ちょっと、この娘こお願いします。おれ、店終わったらすぐに迎えに来ますから。彼女にホットミルクを。八チミツ入れて」

店内には、アフターのホステス待ちだろうか。スーツを着たあまり若いとは言えない男性が席をいくつか埋めていた。小松は隅の銀鼠色のビロードの布ばりのソファに私を座らせた。

「ここで温かいもの飲んで待つてる。おれ、後で迎えに来るから」私はことの展開が読めず、慌てた。

「え、ちょ……何？ 私、帰れるよ。タクシーつかまえてくれればそれに、ここ高いよ。ロイヤルミルクティーが一杯800円するんだよ」

小松は苦笑した。

「あほか。おまえ何の心配してるんだよ。いいか、待つてるよ」

小松が店を出ると同時に、マスターがホットミルクを持って来てくれた。足付きのマグカップ。美しい曲線で、可憐な花が描かれている上品なカップだった。

私は両手でカップを包み、ホンワリと上る湯気に鼻を埋めた。少し熱めのそれをこくりと一口飲むと、優しい甘さがじんわりと胃に沁みた。

ぼーっとした頭をカベに押し付けるようにして待っていた。ミルクを飲んだせいなのか、単に熱が上がって来たのか、体がほてっ

ていた。

「お待ちせ。帰るぞ」

ぐんにやりした体を彼に支えてもらいながら立つ。ああもつこれじゃあただの酔っぱらいみたいじゃない。

「あいつに送ってもらいたかった？ それとも、おれに送って欲しい？ どっちなんだよ」

タクシーをつかまえる間、冷たい空気から私を守るように彼はやつぱり肩に腕を回していた。そんな行為と裏腹に、彼のその声色に怒気が含まれている気がした。

「ううん……小松さんがいい」

迫力に気圧されたように、それでもぼろりと本音が出た。タクシーが目の前に止まる。

「うん。おれもおまえが他の男と一緒に帰るなんて許せないし」

その言葉になんだか目の奥がじんとして、タクシーに私を押し込む彼の腕にぎゅっと力を入れた。彼はすぐに隣に乗り込み、運転手に行き先を告げようと身を前に乗り出した。

「えーと……どこだっけ？」

彼は少し照れたように私の顔を見た。彼は私の住んでいるところを知らなかった。

「え、と。新木場の駅の近くまで行ってください。後は私が説明しますから……」

それだけ言うと私はシートに体を沈めた。耳の後ろから頭ががんがん痛み、目を開けるのもつらかった。

「今日は珍しく道が混んでいますねえ、まあ、ここを抜けたら早いですから」

運転手が気を利かせて断りを入れたのだろうが、それに答える力はほとんどなかった。

「放っておいてって言ったのに……」

私は運転席の後ろの窓際に。その反対の窓際で小松は落ちて来た前髪を乱暴にかき上げながら、流れる景色の向こうを見ていた。眼鏡は仕事でだけかけるのか、今はそれを外した横顔はやはり店にいる時よりも親しげに見える。声色を聞くまでは。

「……そう言われたら、余計に”放っておけねえ”、って思った」
私は何も言わずに同じように窓の方に顔を向け、瞼を閉じた。頭が痛い。苦しい。私は窓を少し開け、風を入れた。少し楽になる。でも、胸の奥はまだ苦しい。思わせぶりなことは、言わないで？ そんな私の気も知らず、小松は吐き捨てるように言った。

「おまえ今日、日下部にずっと寄り添ってさ。あんなことされたら勘違いしない男はいないぞ。特におまえ、あいつのお気に入りだろ絡まれたのは半分自業自得だからな……おれ、クロークで荷物渡すときに聞いたんだよ。あいつの同僚が『え？ かべ、今日待ち伏せかよ？！』って。気になつて理由つけてゴミ捨て行ったら、予感的中」

ああ、小松、日下部さんの席でのあれ、見てたんだ。そっか、待ち伏せのこと知ってたんだ。でもね……そう、自業自得か……。呆れたよね……？

私はもう何も考えなくなかった。閉じた裏の瞼は真っ暗。ネオンなんてもう煌めかない。

駅から道を説明し、マンションの前で小松に抱えられるようにしてタクシーから降りた。彼は私を立たせておいて、車の中に頭だけ突っ込むと

「すぐに戻ってきますから、ここで待っていてください」と運転手に声をかけた。

え、帰っちゃうの……

そう思ったとたん、体から力が抜けた。

「おっと。大丈夫か、って、全然大丈夫じゃ無いんだよな。ほら掴まれ」

彼は私の右腕を取って首の後ろに回し、左手を私の体に回すと歩き出した。空気が冷たい分余計に彼の体のぬくもりを意識してしまふ。また熱が上がりそうだ。

目がほとんど開かない状態でバッグを探り、キーホルダーを取り出す。なかなか鍵穴に挿せない私の手元に業を煮やしたのか、小松が後ろから鍵を奪い取るとドアを開けた。

玄関の照明をつけると、光が目にも痛かった。

「うわ、すげー数の靴箱だな」

備え付けの靴箱の上にも積んであるいくつもの靴箱の上に、彼は鍵を置いた。玄関から上がり口にかけても靴箱は場所を占領していた。

「靴だけは捨てられなかったのよ……」

そういいながら私はその場にバッグを落とし、コートを脱ぎながら傾れ込むようにして部屋に入ると、ベッド脇の絨毯の上につずくまっただまま、動けなくなった。

「頭痛いい……」

「おまえ、そんなところで寝るなよ。薬あるか？」

彼は私の脇に手を差し入れて起こす。

「だ、大丈夫だから。一人で……」

彼の腕から逃れようと勢いを付けて体をひねると、ぐるんと世界が回った。うわ、と彼の声がとんでもない方から聞こえた。

小松は咄嗟に私の腕を取ったが、バランスを崩して私に重なるようにしてベッドの上に倒れ込んだ。

『バランスを崩して？』

違う。私が自分の腕を引いたの。

私の頬に、整髪料で固くなった髪の毛の感触。首筋にかかる熱い息。私の胸をつぶす、小松の体。人の重みが、少し息苦しいくらいのそれが心地よかった。鼓動が重なる。

小松はびくりともしなかつた。つかの間、彼がもぞ、と動く。そし

て耳元で

「タクシー、待たせてあるから。それに、オレおまえのセフレになる気はないし」

……だよ。私となんか嫌だよ。

彼の言葉に、彼と重なったことで上昇したはずの体の熱がすつと冷めて、逆に寒気さえ感じた。

「薬、どこ？」

彼の言葉が素っ気なく響いた。私が薬の場所を教えると彼は身を起こしてすぐに、鎮痛剤を取って来た。そして水の入ったグラスと一緒に目の前に差し出した。体を起こすのを手伝ってくれ、彼は私が薬を飲むのを見守っていた。冷たい水が体に染みる。私は一気に飲みほした。彼は私が薬を飲み終わると、手からグラスを取って部屋のドアの近くに置いてあった自分のバッグに手をかけた。

小松が行っちゃった。

「……かないで。行かないで」

「え？」

私は頭を少し持ち上げて、彼を見上げた。

「……何もしないから…………いてよ」

「何もしないから、って……それ、男の台詞だろ、普通」

彼は苦笑しながらも、すでに肩に掛けていたシヨルダーバッグを床に下ろした。

「タクシー、清算してくる。着替えておけよ、それじゃ寝れないだろ」

「……あ、お財布はバッグの中に……」

「ばーか」

彼は振り向き、歯を見せて笑った。

彼が部屋を出るとのろのろとパジャマに着替え、顔を洗った。ユニットバスの縁に腰掛けて歯を磨き終わると、彼が戻って来て声をかけた。流して水が落ちる音がする。手でも洗っているのだろう。

「大丈夫か？ 中で死んでない？」

「んー、あ、ねえ、ベッドサイドの明かりだけにして。すっぴん見られるの嫌だから」

タオルで口を拭きながらドアの外に声をかける。

「おれ別に気にしないけど」

「私が気になるのー」

はいはい、と声が奥に移動する。

小松がクローゼットを開けて驚く。

「へー、意外とすつきりしてるんだな。あの靴の数から裏切られた」
彼はチャコールグレーのウールのコートを脱いで掛ける。床に落ちていた私のコートも掛けてくれた。

「すっごく捨てたの。あ、中の棚の上に毛布があるから」

「ああ、でも、部屋かなり温かいんだけど」

「オイルヒーターのタイマーをセットしてるの。帰って来る時間に合わせて。エアコンの温風って苦手だ」

私は布団の中から、クローゼットの扉を閉める小松の横顔を見る。

答えない彼に、私は急に不安になった。

「ごめんね、迷惑かけちゃって」

サイドランプの明かりは十分に届かず、彼の輪郭をぼかしている。
「いいよ別に。体が弱ってる時は誰だって人恋しくなるもんだ。おれ、おまえと同じ年の妹いるし」

彼はベッド脇にくと、クッションを引き寄せその上に座った。

ジーンズに合わせて、カカオ色のニットカーディガンからブルーグレーのTシャツが覗いている。この空間に二人きりだと改めて自覚すると、何かを喋っていないと彼が帰ってしまうのではという恐怖に駆られる。

「でも、嫌でしょ、私なんかと一緒にいるの」

「なんで？ おまえ、熱で頭やられちゃったんじゃないの？ 嫌いなヤツをここぞとばかりに部屋まで送るかよ。ていうかおれさつき

から相当、おまえに気持ちアピールしてるの、気づいてない？」

あ、れ……？　そ、そういわれると。でも……

「私なんかのセフレにもなりたくない、って……」

「当たり前だろ、セフレになんかなる気ねーよ。おまえの彼氏じゃないと意味が無いっつーの」

彼は横顔を見せながらぶっきらぼうに言った。

そ、その言葉ってその言葉通りに取っていいの……？

私の目の高さに小松がいる。手を伸ばせば届く距離に小松がいる。もしかして気持ちの距離も……？

嬉しくて頬が火照る。また熱が上がってきたみたいだ。私は布団を鼻まで持ち上げる。じゃあ、私も少し勇氣出して……

「でも、なんでいつもあんなに素っ気なかったの……私、すごく振り回されたんだから……小松さんのこと、好きなのに……」

小松は横目だけで私を見た。その表情だけではなにも読み取れない。

「……今なんて言った？」

恥ずかしさで私は布団を頭まで被った。ヒサトの前では『恥ずかしい』なんて気持ちは全然起こらなかったのに、この人の前じゃ、もう、だめだー。消えたい。

「おい、よく聞こえなかった。もう一度言って」

小松が布団を軽くひっぱる。私は頑に顔を隠す。

「やだ。もう私1回言ったから、今度は小松さんの番でしょ」

沈黙？　反応無し……ここで反応無いつてかなり辛いですけど。私はじっと彼の言葉を待つ。

「おまえ起きてる？　起きてるなら顔出して欲しいんだけど。おれ、布団と喋る趣味無いから」

私は恐る恐る布団から顔を出すと、正面に微笑む小松の顔を見た。ランプの頼りない光でほんわりと温かく見える。

「やっと出て来た。なあ、おまえのセフレどうした？」

微笑みが消え、妙にまじめな顔で彼は聞く。

「切ったよ。もう全然連絡してない」

「じゃあ、彼氏は？」

「いないよ。どうしてそんなこと聞くの？」

彼はまた口角に笑みを浮かべる。ころころ表情の変わる人だ。

「口説くならリサーチ必要だろ。ていうか、おまえ変わったから。」

居酒屋で飲んだ時はただのカワイイ顔した今どきの女しか思わなかったけど。最近いい感じになったよな」

「うそ。変わってなんか無いよ。サロンにももう行ってないし」

「いや、変わった。おまえ最近指名増えたじゃん。そういうのって、ああいうところに来る男たちはすぐにキヤッチするんだよ」

ああ、そう言われればそうかも。

「だから、絶対に男が出来たんだと思った。それなのにおれ、店でおまえの胸とか半分出てる網タイツの尻とか見せられて、気持ちの持って行き場がないだろ。おまえが他の男のものだって思うだけで腹立つし。だから店ではいつもかなり気が立ってた。おまえを見たくなかった。それが、素っ気なかった理由」

私は淡々と話す小松から目が離せない。彼の瞳の温度は、とても温かい。それは明かりだけのせいではないと思う。

「でも、目で追わずにいらなかった。気がついたらお前のこといっつも見てた。日下部に寄りかかっているの見てかなり逆上」

「キョーコが小松さんが新しいグラス持って来ない、って怒ってたよ」

「あー、キョーコさんにはバレてたな。『あんた、頭の中身ダダ漏れ』って言われた。あ、『小松さん』じゃなくて『順也』でいいぞ。おれもさつきから『おまえ』呼ばわりだしな」

うそ。ファーストネームオツケー？ 嬉しい。今すごく嬉しい。

彼の口からもっと私のこと、聞きたい。でも、なんて言えばいいんだろ。もっと私のことなんて思っているか言って、って？ じゃあ、私のことも江美子って呼んで、とか？

嬉しさで頭が軽くパニック状態の私はただ小松の顔をじつと見つめることしか出来なかった。彼はちよつと首を傾げた。

「おまえ、頭大丈夫？」

「へ？」

いや、確かに有頂天だけど。

「あ、だから頭もう痛くないかって」

「え……う、うん。痛み引いて来た。薬が効いてるみたい。ありがとう」

「そうか、よかった」

彼は心底安心したように穏やかに微笑んだ。

ふわ、と彼の手が伸び、私の頭を柔らかな手つきで撫でる。温かくて大きい手。

気持ちいい。

私はうつとりと瞼を閉じる。

手はゆっくりと私の髪を梳くように肩の方まで流れる。そしてまた戻って、何度も、何度も。偶然か故意かときおり彼の指先がうなじに触れると、ぞくぞくと背筋を何か走る。寒気じゃなくて。もっと甘い感じの。もっともつと順也を感じたい。そう思ったらするりと言葉が口から出てしまった。

「順也もこっちにくればいいのに……逆指名」

「……おまえ、そういうこと言うな。事故とはいえさっきおまえを押し倒してからもうおれガタガタだから。これ以上何かあったらヤバい。おれ、もっとおまえを大事にしたいんだ」

今彼はどんな顔をしているんだろう。見てみたかったが、もう瞼が重くて。

「……順也のせいだよ」

彼の顔を見て呼び捨てになんか出来ないから、目はつむつたまま。ずっと撫でられている頭の方から、安堵の波がじんわりと体中に伝わる。体の力が抜けていく。

「うん？」

彼の声が耳に低く響く。なんだかすごく色っぽい。

「私が変わったのって、順也がきっかけだよ」

「……それは、嬉しいな」

「私も……」

意識が遠のく。

順也、好き。

声に出したかどうかわからない。ただ心地く闇に吸い込まれていく過程で、彼の声を聞いた気がした「おれも、江美子が好きだ」と。それは夢かもしれない。だって、私がずっと聞きたかった言葉だから。

目が覚めると、彼はいなかった。ベッドサイドの時計は10時過ぎだった。カーテンの隙間から初冬の淡黄色の朝日が差し込んでいた。

彼が座っていたクッションの上に、きちんと畳まれた毛布が乗っている。

すごく良く寝た……

まだ少し熱はあるものの、頭はすっかりしていた。

昨日のこと、夢じゃないよね……

順也との会話を思い出すと、目尻にじわりと熱が浮いて来る。

私がベッドの上に身を起こすと、テーブルの上のメモに目が止まった。スケジュール帳のメモ欄をちぎったものだ。それに手を伸ばす。ちよつとよそ行きな字で、滑らかな走り書き。

『永久指名 神田江美子 小松順也 090××20×351』

私は思わず口元をほころばせる。

「どんなに高くつくんだっつーの」

それからスマホを取ってメモの番号をタッチした。

【純粹バニーガール 完】

おまけ 出張バニーガール (前書き)

純粹バニーガール、その後小話です。

おまけ 出張バニーガール

金曜の夜。

私はバイトが終わった後に順也の部屋へ行く。

二人でソファに座って深夜テレビ定番の昔の映画を見る。

「ねー、順也は『家でバニーのカッコして』って言わないんだね。普通彼女がバニーやってたら言うでしょ」

「おれ、ナースとかバスガイドとか、そういうコスプレに興味ねーし。店で十分見てたし」

「ふうん。せっかく出張バニーしてあげようとバニーコート持って来たのに」

沈黙。順也はテレビ見ながら固まってる。あ、天使と悪魔が格闘中？

「え……、じゃあ、せっかくだから着てみれば？」

あ、悪魔の勝ち？

「向こうで着替えて来る〜」

「あ、さ、」

「何？」

「どうせなら生脚で網タイツな」

「お客さん、通ですね〜」

「ご指名ありがとうございます」

順也再び固まる。

「……かなりヤバいでしょ。いや、そのカッコがヤバいんじゃないかって、おれの部屋にそのカッコでおまえがいるというシチュエーションが来る」な。うわー！。日常がモロ非日常に

「興奮する？」

「いや、ま、少し……ちょっとこっち来きて後ろ向けよ」

「何？」

「ちゃんとシツポも付いてるよ……」

「当たり前でしょー。お店と同じよ……ひゃんっ！」

お尻にこの感触って。

「ちよつと順也、お尻舐めないでよー！」

「いやー、ついね。ていうか、これどっから食べばいいんだよ……」

うわー、彼のテンション確実に上がってる……。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0700v/>

純粹バニーガール

2011年8月12日03時13分発行